様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 1 日現在

研究種目：	基盤研究（C）
研究期間：	2005～2008
課題番号：	１７５３０６０５
研究課題名（和文）	「自己実現」言説の歴史社会学 －特に思想の輸入・受容過程に焦点を当てた実証研究－
研究課題名（英文）	Historical Sociology of Discourse on "Self-Realization": A Positive Study Forcused on its Process of Import and Acceptance
研究代表者	佐々木 英和（SASAKI HIDEKAZU） 宇都宮大学・生涯学習教育研究センター・准教授 研究者番号：４０２９２５７８

研究成果の概要：

本研究の主題である「自己実現」は、現代語および現代教育における目標として一般化し通俗化してしまっているのにもかかわらず、その具体的内実が学術的に十分に検討されてきたとは言い難いものである。本研究は、この言葉に徹底密着し、それをめぐる諸々の「事実」を集積して、その社会的受容の様相について、特に思想レベルで展開された言説に注目しながら歴史的な観点から実証することが主たる目標であった。その結果、自己実現概念の歴史的展開をめぐって、多くの興味深い発見ができた。第一に、「自己実現」という日本語の歴史的原点は、イギリス理想主義の立場に立つ哲学者グリーン（T.H.Green）の「自我実現説＝theory of self-realisation」が 19 世紀末に輸入・翻訳されたところに位置し、当時は「自我実現」という訳語の方が相対的に普及していた。第二に、明治期から第二次世界大戦前の時期の思想的展開として、「自己実現」の最大のキー概念が「人格」であったために、両者が極めて相関性の高い概念として扱われていただけでなく、自己実現が「人格の完成」と同義で用いられる例が頻繁に見受けられた。第三に、戦前日本における自己実現に関する輸入思想は、知識人の間に普及していくやいなや、すぐさま換骨奪胎される形で日本独自の展開を見せたが、個人主義的展開・国家主義的展開・神秘主義的展開といった三つの方向性が各々独自の展開を示したり、他の流れとせめぎ合ったり合流したり、さらには乗り換えがあったりしながら、相互干渉的に重層的に形成されていった末、国家主義的概念に回収されたと理解できる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　　計
２００５　年度	800,000	0	800,000
２００６　年度	700,000	0	700,000
２００７　年度	600,000	180,000	780,000
２００８　年度	600,000	180,000	780,000

年度			
総　　計	2,700,000	360,000	3,060,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：基盤研究（C）、教育社会学（番号 4002）

キーワード：自己実現、自我実現、人格、人格の完成、国家、個人と社会、教育勅語

１．研究開始当初の背景

本研究の背後には、現代的に重要キーワードになっているにもかかわらず、これまで十分な考察が深められてこなかった「自己実現」という言葉について何らかの形で明らかにすることが、教育学的に危急の課題だという問題意識があった。

研究対象の「自己実現」は、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」（2003 年３月）において「教育の目的」に位置づけられて新たに規定する理念として前面に打ち出されたことがあるほど、21 世紀の教育界の重要キーワードになっている。加えて、それは、福祉・労働・経営・政治など他領域においても、理想や理念として掲げられることが多い。だが、それは、汎用性が高く非常に一般化した言葉であるがゆえに、かえって自覚的に検討される機会に恵まれなくなってしまい、どの分野においても真正面から研究されることが忘却されがちな「学術的穴」と化している。

また、自己実現に関する原理的研究は多少あるが、その歴史的変遷を考察したものは、部分的なものを含めて皆無に近い。この事情は、国外でも同様のようである。したがって、自己実現に関する歴史的研究を進めるだけでも、国内外を問わず、相当な学術的貢献ができそうである。

２．研究の目的

研究主題の「自己実現」は、従来の教育研究において体系的に検討される機会が皆無に近かったために、極めて抽象的かつ曖昧なまま放置されている単語の一つである。だが他方で、この言葉の「語られ方」を分析してみれば、それが様々な領域で普及していくにつれて、分野的差異や時代状況などが複雑に絡み合って内実が多様化し、様々な自己実現観が混沌状態になって乱立してしまっていることが判明する。

本研究は、こうした諸々の自己実現概念を歴史的観点に立って整理・配列して描写・鳥瞰すると同時に、文化的・社会的背景との関わりにおいて、その生成構造を明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

研究方法論の基本的な考え方は、「自己実現とは何か？」といった素朴な疑問を出発点にしつつも、この問いを思索的に追求する方向に向かわせるのではなく、「自己実現」に関する諸々の「事実」を集積して歴史的解答を得ようとする方向性を優先するものである。つまり、「自己実現」という日本語がどのようにして社会的に受容されていき、かつ具体的にどのような内実を伴って歴史的に展開してきたかを概観するものである。

具体的な作業としては、数多くの歴史的史料を掘り起こし、「自己実現」や「自我実現」という単語および類似・関連する単語が含まれた言説を丁寧に読み解いていくことを方法論的基軸に置く。その際に、それらの単語が如何なるものとして輸入されて、どのような人々により、どのようにして受容され、どのような社会的影響を及ぼしていったかについて、思想史水準と社会史水準との段差を意識しながら実証していくことになる。

４．研究の成果

(1) 研究主題の「自己実現」という用語は、明治維新以前には存在していなかった。この日本語の歴史的原点は、明治・大正期に活躍した哲学者の中島力造が、1892（明治 25）年に「英国新カント学派に就て」という題の講演を行い、19 世紀のイギリスの理想主義哲学者であるトーマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green）の思想を日本で初めて公の場で紹介したことを基準にして設定可能である。この日本語は、グリーン思想において重要キーワードとなっている“self-realisation”が「自己実現」もしくは「自我実現」と翻訳されたことに始まるものである。

ただし、自己実現概念の輸入と受容をめぐっては、第二次世界大戦の前と後とでは大きな断絶があり、発祥としては各々に違った源流を持っている。図式的に単純化すれば、以下のようになる。戦前には、グリーンの学説を媒介として倫理学の分野から輸入された「自我実現説＝theory of self-realisation」が、一部の知的エリート青年層を中心に流行した。これに対して、戦後には、20世紀のアメリカの心理学者であるマズロー(Abraham Harold Maslow)を媒介として心理学の分野から「自己実現理論＝theory of self-actualization」が流入し、「自己実現」が大衆化する出発点となった。

(2) 具体的素材を収集して整理すればするほど、本研究を進めていく上で基盤認識として押さえるべき着眼点が浮かび上がってきた。そして、それらは、研究方法論に対する重要な示唆ともなっている。これに関して、主に以下の三つのポイントに集約できる。

第一に、基本的事実として、西洋からの「輸入物」であった日本語「自己実現」は、その中味については、輸入直後から早い時期から半ば「純国産品」として展開した。その際、グリーンやマズローといった大元の思想家が完全無視されたわけではないけれども、「自我実現」や「自己実現」の名の下に、日本社会の歴史的磁場に強く引きつけられる形で諸々の自己実現思想が林立することになったのである。

第二に、その思想史的展開は、基本的特質として、「自己を実現することがどういうことか？」が問われ続けた歴史としてよりも、「自己という名において、どのような価値を実現しようとするか？」が追求されたり主張されたりし続けた歴史となっている。その結果、副産物的ではあるが、この言葉を媒介とすれば、いかなる価値観が社会的に受容され普及していったかの時代ごとの特徴を明らかにすることができる。

第三に、自己実現概念の受容の基本線には、個人と社会との関係が問われ続けてきたという歴史的事実がある。明治期から第二次世界大戦直前までの時期においては、個人と社会・国家との関係のあるべき姿に対して議論の焦点が当たり続けて、自我実現や自己実現を提言するにしろ批判するにしろ、個人主義的思想に陥ることが警戒された。これに対して、現代的には、自己実現という言葉が用いられる際には、それはもっぱら個人的課題を意味していることが前提になって語られがちである。そのため、自己実現は、個人主義のシンボルとして称揚されたり、逆に厳しく非難されたりするのである。

(3) 自己実現概念と意味的に類似していると扱わざるをえない言葉がいくつかあるが、その中でも「人格」や「人格の完成」は明確に歴史的根拠を伴って親和的に扱っていかざるものであるため、いわば自己実現概念の歴史的基点を成していると評価されるべきものである。言い換えれば、「自己実現＝自我実現」を研究する際に、「人格」や「人格の完成」についてもあわせて注目すべき必然性がある。

第一に、明治20年代に輸入・紹介されたグリーンの自我実現説の最重要キーワードが“personality”であったため、自我実現説が「人格」という日本語を生みだす思想的母胎となっているという思想史的事実を指摘できる。だが同時に、グリーンの自我実現説をほとんど棚上げする形で「人格」という言葉が一人歩きしていったという側面にこそ強調点を置かざるをえない。

第二に、明治維新から第二次世界大戦前までの時期には、「自己」や「自我」が独善に陥ることへの警戒感から、個人と社会との関係のあり方に焦点が当たり続けたが、その調停・統合概念として「人格」が最大のキーワードとなった。そのため、自己実現は「人格実現」や「人格の完成」といった表現に直裁的に置換されがちだったのである。

第三に、「人格の完成」という表現に関しては、戦前の教育勅語と戦後の教育基本法とが連続性を持つという思いがけない発見ができた。教育基本法で「教育の目的」とされている「人格の完成」というキーワードは、井上哲次郎が教育勅語について解説を加える中ですでに「教育の目的」の一つとして明確に用いられていた。したがって、この言葉の扱い方について、戦前と戦後とでどのような異同があるかを明らかにするという新しく意外な課題が生まれた。

現代的感覚では、「人格」という言葉はあくまでも一個人に完結し一個人の中で扱われるものに理解されがちである。だが、戦前日本においては、「人格」とは、個人と社会との調和を前提とする概念であり、そのバランスが崩れて行き過ぎた場合には国家主義的色彩を帯びてくるが、その背景

として特殊日本的な神秘主義的思想が関係していることが判明した。

日本語「人格」は、教育基本法（1947 年制定、2006 年改正）の「教育の目的」が「人格の完成」であると明記されているように、教育学分野における最重要キーワードの一つである。よって、この言葉の戦前の展開を明らかにし、しかも従来の研究ではほとんど指摘されてこなかった新奇な事実を発掘できたことは、画期的だと思われる。

(4) 歴史的事実を鑑みれば、多くの場合、輸入思想である「自己実現＝自我実現」は、換骨奪胎される形で日本独自の展開を見せている。この思想的展開および社会的受容の様子について包括的な言い方をすれば、大きく三つの流れに分けて捉えることが可能だと判明した。

第一の流れは、自己および自我は「個人の内面において実現するものだ」という考え方である。これは、西田幾多郎の哲学、大正期の白樺派、阿部次郎の人格主義などに顕著である。この流れは、社会との関係云々よりも「個人としての自己」を深めることを優先するため、社会的に普及するにつれて、自己の欲望に身を任せようとする発想に偏向していったり、個人主義の牙城と化していったりしたという側面がある。

第二の流れは、自己および自我は「個人と社会との関係において実現するものだ」という考え方であり、個人と社会との調和の中に「自我実現＝自己実現」を見出すものである。それは、個人偏重主義になることを恐れる反動で、「社会」さらには「国家」を第一義に考える思想へとスムーズに移行しがちであり、井上哲次郎・吉田熊次・紀平正美などが中心的役割を果たしながら展開された。

第三の流れは、自己および自我は「人間と神との関係を中核にして実現するものだ」という考え方であり、「自我実現＝自己実現」が自己と神との調和的概念として理解されたのである。元々は宗教的要素が強かった西洋の自己実現思想が日本に輸入される際、その多くは神的要素を骨抜きにされた。しかし、綱島梁川など、少数派であるとはいえ、西洋的な神を想定して自己実現を考える人もいたし、時代を下るにつれ、自己実現思想と東洋的な汎神論との類似性を指摘する人も出てきた。

これらの三つの流れが各々独自の展開を示したり、他の流れとせめぎあったり合流したり、さらには乗り換えがあったりしながら、自己実現思想は相互干渉的に重層的に形成されていった。

(5) 本研究では、現代語として一般化している「自己実現」の輸入および受容の様相を実証することが主たる目標になっているが、第二次世界大戦前の思想的・社会的状況を掘り下げていけばいくほど、申請時にはあまり予期していなかった興味深い発見が幾つも出てきた点に意義がある。

特に、実際、ファシズム期に「自己実現」や「自我実現」の意味合いが半ば強引なまでに国家主義的解釈に引きつけられていくという事実は重要である。その思想的メカニズムを構成する発想として、これらの用語は価値的に空白なので、その中味を規定する価値を挿入できるという恣意性を前提として、「自己および自我は国家においてこそ実現するものだ」と解釈する流れがあった。その典型例として、吉田熊次は「忠孝」を「完全なる自我の実現」とみなし、井上哲次郎は「立派な日本人としての自我実現の適切なる方法」が教育勅語や軍人勅諭に示されていると述べている。

さらに、戦前の自己実現思想の展開として、「自己実現」や「自我実現」というキーワードとして、個人主義と国家主義とが対立しながらも、根本的なところでは通底しあい、ときに両者が結合していくという奇妙な逆説が存在することは、特筆に値することである。

こうした事態が生じるメカニズムを解明するための手がかりとなったのは、文学研究者の鈴木貞美が、大正期に広範囲にわたる多彩な思想運動が展開されつつも、どの分野でも「生命」という言葉が氾濫していることに着目して名づけた「大正生命主義」という捉え方である。なお、この用語は、哲学者の中村雄二郎や宗教学者の山折哲雄などの支持を得て、研究者の間で普及しているものである。

明治期以来、「真の自己」が何であるかということが特に哲学分野で問題となり、その中で自我実現思想を経由する思想家も相次いだが、大正期には、自我の根幹に「生命」を潜在的に置いた思考が優勢となった。その際の最大ポイントは、死が「生命」と必ずしも対立するものではなく、ときに「より大きな生命の流れ」の一部の現象とみなされる場面が増えてきたことである。こうして、「自我」や「自己」とは個人の解放を主導したキーワードであったのにもかかわらず、「生命」を媒介として神秘化し、個人を超える普遍的思想へと逆説的に展開していっ

たのである。だが一方で、1923 年の関東大震災を前後とする時期に、生命主義が「大宇宙の生命」といった普遍主義的発想から「民族の生命」といったナショナリスティックな観念に集約される傾向が顕著になり出した。

本研究成果により、神国主義的な自己実現思想が井上哲次郎・吉田熊次・紀平正美らによって昭和初期に力説されていた事実についても、生命主義の神秘的側面の洗礼を受けた人にとっては、こうした考え方が違和感なく受け入れやすいものだったのではないかという推測が可能となった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 佐々木英和「戦前日本における『自己実現』の社会的受容－グリーン思想の国家主義的歪曲をめぐる覚書き－」、イギリス理想主義研究会編『イギリス理想主義研究年報』創刊号、2005 年 7 月、28～37 頁

② 佐々木英和「自己実現概念の歴史的展開に関する覚え書き－19 世紀末から 21 世紀にかけての日本的変容の概観－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 56 号第 1 部、2006 年 3 月、213～227 頁

③ 佐々木英和「自己実現概念を方向づける歴史的基点に関する覚え書き－『人格の完成』概念との親和性を例題として－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 57 号第 1 部、2007 年 3 月、195～209 頁

④ 佐々木英和「自己実現思想における個人主義・国家主義・神秘主義－人格概念の多元的展開に関する試論的考察－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 58 号第 1 部、2008 年 3 月、265～280 頁

⑤Sasaki,H “Self-Actualization and/or Self-Realization in Japan: A Historical Approach to its Various Aspects,” 宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第 59 号第 1 部、2009 年 3 月、157～172 頁

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕（計 1 件）

① 佐々木英和『「自己実現」言説の歴史社会学－特に思想の輸入・受容過程に焦点を当てた実証研究－』（平成 17～20 年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）課題番号 17530605 研究成果報告書）、2009 年 3 月、全 94 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

佐々木 英和（SASAKI HIDEKAZU）
宇都宮大学・生涯学習教育研究センター・准教授
研究者番号：４０２９２５７８

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし